

# 佛教大学 総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2025.3 No. **46**

- 巻頭言
- 2024(令和6)年度 新規共同研究紹介
- 2024(令和6)年度 共同研究総合評価の実施
- 佛教大学総合研究所紀要第32号 目次
- 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集第13号 目次
- 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集第14号 目次
- 彙報

佛教大学総合研究所

## 総合研究所の研究活動

総合研究所 所長 細田典明

2023 年 4 月から 2025 年 3 月までの 2 年間、総合研究所長の任を務めてまいりました。昨年度の巻頭言に「総合研究所改革 3 点」と題して問題点を提言いたしました。この度、役職異動のため、改革の経過と成果を年度毎に報告することが出来なくなりましたが、本学の研究活動の学際的拠点としての総合研究所の存在が重要なことになりました。特に、昨年度挙げた 3 点の提言（プロジェクト研究・特別研究員・情報発信と社会貢献）の 3 点目の問題を 2 つに分け、4 点に整理して以下に報告いたします。

### 1. プロジェクト研究

プロジェクト研究は学際的、異分野複合のものしくは先端的な研究で次の 3 点をすべて含みます。

①本学が特に必要とするか、または取り組むべきもの

②社会的要請または今日的課題等に即応するもの

③競争的資金（科学研究費補助金等）または公的助成金等の獲得を目指すもの

あるいは、学部学科、研究科の単独または共同・連携により、学術研究の高度化、活性化および若手研究者の育成等を目指す研究です。すなわち、外部からの競争的資金獲得はどの研究機関にお

いても使命化されている課題と言えます。プロジェクト研究は、一方で科研費等による研究の橋渡しの性格を有し、他方で科研費等による研究を拡張する意義があります。研究課題の実施は学生への教育活動を充実させることに繋がり、院生の参加は大学院研究指導に効果的なものとなります。

本年度から以下の 3 件のプロジェクト研究が実施されています。

・多死社会を見据えた社会的共通資本の向上による地域共生社会の創造を目指した人材育成プログラムの検討

・タイ貧困層に暮らす障がい児が医療、教育を受けるための評価システムの構築

・行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究

### 2. 特別研究員

佛教大学大学院博士後期課程単位修得満期退学者、修了者に対し、研究者としての更なる成長を支援するため「特別研究員」制度を設けています。2001 年度に総合研究所研修員の名称が始まり、2010 年度から総合研究所特別研究員に名称を変更し現在に至っています。特別研究員は、総合研究所を研究の足場として、個人研究を進め、学会発表や論文投稿などさまざまな場所で大きな成果を残していますが、特別研究員を希望される方

は必ずしもこの目的に合致するものではなく、ここ数年の科研等申請にたいする採択率は高いものとはいえません。特別研究員規定の緩和が望まれます。そこで、次年度の募集要項では、より広く特別研究員を募るために「特別研究員規定」の「付帯義務」を排除し、「特別研究員は、任用年度中に競争的資金（科学研究費補助金等）に対して、申請を行うことに努めるものとする」ことといたしました。さらに、この二年間で毎年、特別研究員懇談会を開催し、多くの方々が参加され、お互いの研究課題に関する質疑応答も有意義でした。そして、特別研究員同士、さらには運営委員をはじめとする教員との交流の機会が切に望まれました。

### 3. 情報発信

本学には活性化されていない和書をはじめとする資料を豊富に所蔵し、附属図書館ではデータベース化を進めています。特別研究員を希望される方々は、個々に関心のある資料を発掘し、校訂・和訳・注解を行い、本学所蔵資料の情報を発信するとともに、それぞれの研究に活用していただきたい。より総合研究所の研究成果が周知されるように整備する必要があります。さらに、こうした教員や研究員をはじめとする研究活動は、図書館報『常照』、広報誌『B-ism』、研究活動報『manako』などに紹介されています。従って、情報発信はなされていますが、教員間でお互いの専門分野や研究内容を知る人は少ないでしょう。「教員紹介」の欄に上述の広報誌の PDF がリンクされているととても親しみやすいものになるのではないのでしょうか。

### 4. 社会貢献

これまでの総合研究所出版物の中には、一般書としても関心を持たれる研究成果があります。紀要や成果報告書の性格として、専門用語や参考文献の注記、資料の掲載等、論文の体裁上必要不可欠なものです。紀要や成果報告書をパイロット版とし、図版等を多く掲載した一般書として、例えばブックレットや新書の形で安価にして発売することが望まれます。紀要や成果報告書では社会貢献として認めにくいものですが、多くの人に手に取ってもらうことは、本学の研究成果がより広く知られることであり、積極的に進めていく事業の一環として考えられます。また、オープンラーニングセンターの講座は教員の話オンラインで聴講出来る、画期的な、社会的貢献の場と言えます。日本文化の中心を担ってきた京都の中で、生活の利便性と文化遺産の両者を兼ね備えていることは、教育機関、特に大学には大事なことです。主に紫野キャンパスと二条キャンパスの二大キャンパスからなる本学もこの両者がうまく生かされ、相互補完的に本学の特色として認識されることが望まれます。

さらに、宗教文化ミュージアムが広沢池に隣接していますが、こうした貴重な施設が相互補完的に活用され、教員同士の相互理解が深まりとても重要なことと認識しています。

総合研究所の社会貢献もオープンラーニングセンターや宗教文化ミュージアムの活動と無縁ではなく、図書館との関係のように相互補完的で継続的な関係が構築されることを切に願っております。

## ■プロジェクト研究A「多死社会を見据えた社会的共通資本の向上による地域共生社会の創造を目指した人材育成プログラムの検討」（1年目）

### 研究代表 濱吉 美穂

#### 研究組織

##### <研究員>

濱吉 美穂 保健医療技術学部准教授

末安 民生 保健医療技術学部教授

八木 透 歴史学部教授

植村小夜子 保健医療技術学部教授

清水奈穂美 保健医療技術学部准教授

阿部 慈美 保健医療技術学部講師

安本 厚子 保健医療技術学部助教

高木 健志 社会福祉学部教授

市川 定敬 仏教学部准教授

坪井 剛 仏教学部准教授

奥山 紘平 保健医療技術学部助教

渡邊 照美 教育学部准教授

大藪 俊志 社会学部教授

##### <嘱託研究員>

高 淑娟 輔仁大学医学院 副教授（非常勤）  
、慈済大学病院ホスピス病棟臨床宗  
教師佛教大学非常勤講師

#### 研究進捗状況

多死社会の到来を迎えたわが国において、超高齢多死社会に対応できる地域共生社会を構築する事は喫緊の課題である。少子化による経済活動の減弱化を想定した上でよりゆたかな社会を目指すためには、宇沢が唱えた「社会的共通資本」の観点から地域共生力の強い社会を創出することが重要であると考えている。そこで本研究では本学の強みともいえる「宗教・歴史・民俗・福祉・医療」と

いった教育的資源を総合的に活用し、終末期ケアを必要とする人や社会的に孤立した人などにも多様なつながりが生まれやすくなるための環境整備や専門職がパートナーとなりコミュニティにつなぐ社会的包摂の観点から、社会共通資本力の高い多死社会に適応しうる地域共生社会の実現を目指し、地域生活・福祉・健康マネジメントの品質を高めつつ活動できる人材育成を目指した教育プログラムを検討し実施・評価を進めている。

本年度は研究開始1年目ということで、まずは共同研究員メンバー間で毎月の定例会議を開催し、ブレインストーミングを進めた。その中で、社会的共通資本についての理解を深めながら認識を共有し、社会的共通資本の理念を背景として活動していると想定されるフロンティアランナーや施設を洗い出し、ヒアリングを開始している。また、今年度は3回の公開研究会を開催し、フロンティアランナーからの貴重な知見を得る機会を持った。今後は、ヒアリングデータの分析作業を進め、地域生活・福祉・健康マネジメントの品質を高めつつ活動できる人材育成教育プログラムの内容を精査して教育プログラムを確立させていく予定である。

#### 研究会等の開催状況

##### 1.公開研究会の開催状況

第1回公開研究会 講師 占部まり先生

2024年5月1日16：00～17：40 出席者15名

第1回公開研究会は、宇沢国際学館の取締役であり

内科医である占部まり先生に「多死社会における社会的共通資本について」ご講義をいただいた後、共同研究研究員と今後の研究の方向性についての議論を交わした。講演を受け、社会的共通資本の概念は、混沌とした現代社会において多くの人が理解しておくべき事であると改めて感じると共に、「自分の想像力がおよばない人々を守り・ゆたかな社会を目指す」ためには、これから大学としてどのような力を持つ人材を輩出するための教育が求められるのか？という点を改めて考える必要性を強く感じ、本学の強みである「宗教・歴史文化・教育・社会・社会福祉・保健医療」といった多様な教育力を武器に総合的な観点で教育プログラムの作成を目指す事を認識した。

第2回公開研究会 講師 坪田康佑 氏（看護師、看護・介護ジャーナリスト）、高丸 慶 氏（株式会社ホスピタリティ・ワン代表取締役）、大河内大博 氏（浄土宗願生寺住職、訪問看護ステーションさとさんが願生寺共同代表・チャプレン）

2025年2月20日15：00～18：00 出席者30名

第2回公開研究会では、既に先見の明を持って活動しているフロンティアランナーから、多死社会に備えるための智慧と人材育成についてのヒントを得られた。

ソーシャルデザインを考えるとときには、ほしい未来を見据え、そのためのリソースを見つけ出しそれをどう生かすかを思考すること、さらにどんな方法で行えば人に理解を得て関心を持ってもらえるかのデザインを考え、本来はそれらをどんな人が必要としているのかを思い描くことが重要であるということを問われていた。これから求められるソーシャルデザインを描き、継続できる地域活動に落とし込まれている活動のプロセスやマネタ

イズの在り方についての様々な示唆を得ることができ、今後の研究を進めていくうえでの様々なヒントを得る事ができた。

第3回公開研究会講師 八木透先生

2025年3月10日16:00～17:30分 出席者35名

多死社会を迎える我々にとって、日本人にとっての死について改めて考え、それらを取り巻いてきた歴史・文化的背景を理解した上で、善きしくみは継承し、足りないものは新しく創ることを想定し、「日本における葬送儀礼と死者祭祀の特質とその変容 - 仏教が果たした役割について - 」というテーマでの研究会を開催し、葬送儀礼は元々仏教領域の役割ではなかった所からどのような変遷を経て現代の様式に移り変わったのか、といった事を含め理解を得た。様々な文化的背景を理解する事によってこれからの多死社会を想定した社会装置を検討していくヒントが得られると感じた。

#### 2.施設等へのヒアリング実施状況

1) 2024年12月13日 龍岸寺 池口龍法住職

地域や家という枠組みが変化する中で、寺院の役割に求められる事やどの様に地域に人と関わっていくかについて示唆を得た。

2) 2024年12月25日・26日 フキデチョウ文庫  
代表理事 沼田雅充氏、社会福祉士 建部詩子氏  
地域住民や学生達を巻き込み智慧を借りて、「福祉×本×まち」をテーマにして施設を運営しておりスタッフとの理念の共有といった面でも示唆を得た。

3) 2025年1月28日 看護小規模多機能施設 しずちゃんハウス役員 松本健史氏

それぞれの生活を大切にすることを目的に活動されており、無理のないコミュニティ構築についての示唆を得た。

## ■プロジェクト研究A

### 「タイ貧困層に暮らす障がい児が医療、教育を受けるための評価システムの構築」（1年目）

研究代表 和智 道生

#### 研究組織

<研究員>

和智 道生 保健医療技術学部講師

青木 好子 教育学部教授

<嘱託研究員>

寺田 恭子 桜花学園大学保育学部教授

里中 綾子 愛知淑徳大学健康医療科学部教授

熊澤友紀子 愛知淑徳大学国際交流センター助教

#### 研究進捗状況

タイは日本と同様に9年間の義務教育制度が定められているにもかかわらず、障がい児は16.2%しか初等教育を終了できておらず、それに加え、都市部と農村部では医療格差、所得格差が大きく、月平均家計所得におけるバンコク首都圏と東北部農村部の格差は2倍以上という現状がある。ゆえに東部の農村部においては障がい児に対する様々な支援が不足している可能性が考えられる。本研究はタイの農村部に住む障がい児およびその家族を訪問し、医療、教育の実態調査を行い、彼らと社会が抱える問題点を抽出することを目的とする。

今年度は8月に現地調査を実施し、農村部に住む7例の障がい児宅へ訪問し、各家庭を取り巻く問題を個別に検討、介入アプローチを実施した。また、3月に再度訪問し、半年間での変化を調査した。自宅訪問に加えて、障害児を取り巻く周辺の環境として障がい児学生を積極的に受け入れているマハサラカム・ラチャバット大学へ視察し、受け入れ

システムや教育システム、卒後の進路就職状況などについて聞き取りを実施した。コーンケンシーサーワン特別支援学校（全寮制）にも訪問し、全寮制に入るための運動機能レベル、知的レベルの基準や自治体からの支援制度について聞き取りを実施した。



以下に特徴的な変化のあった2例を示す。

#### 症例① 痙直対麻痺の女儿11歳



運動機能は肘伸展筋力や握力は弱いものの、あぐら座位は自立しており、移動はずり這いで可能。会話は問題なくできるが、読み書きできない、短

い単語や数字は理解できるようになった。できるADLは多くあるが、祖母が介助することが多い。小学校は近くにあり、校長も入学受入は許可していたが、祖母が近くで見ていたい気持ちが強く、心配で行かせていない。



2回目の訪問時までに地元NPOと協議し、普通型車いすを給付した。その結果、2回目の我々の訪問時には近所のスーパーまで自走で買い物に行くことが可能になっていた。



#### 症例②痙直対麻痺の男児9歳

運動機能は膝立ちやつかまり立ちは自立しているが、歩行は介助もしくは歩行器で実施している。知的には問題ないが、学校に通っていないため、文章は読めない。自宅にて字をなぞるドリルで書字の練習中。日常生活動作は最小介助で行えるため、近隣の小学校もしくは全寮制の特別支援学校などに入学するための検討を行った。



#### 研究会等の開催状況

今年度は、現地調査のための研究計画立案のためのミーティングを実施した。また、2回の現地調査後には各自の計測データを集約し、論文執筆に向けてのミーティングを実施した。

## ■プロジェクト研究A

### 「行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究」（1年目）

研究代表 齋藤 蒙光

#### 研究組織

##### <研究員>

齋藤 蒙光 仏教学部准教授

南 宏信 仏教学部准教授

坪井 剛 仏教学部准教授

三好 俊徳 仏教学部准教授

田中 裕成 仏教学部講師

#### 研究進捗状況

日本には古代から「行者」とよばれる、仏道修行に専念し特別な存在として信仰された宗教者が存在する。日本の文学・歴史学・宗教学において、このような行者が重要な存在であることは論を俟たない。都市部の寺院に所属するのではなく、山林修行や民間への布教を行うなど独自の宗教活動を行うことで、権威化され信仰対象とまでなった行者について研究をすることは、日本における仏教実践の一側面について明らかにすることにも繋がる。すでに修験道史や古代史などに関する研究が蓄積されているが、個々の分野での研究に留まるものが多い。よって本研究では、分野を横断した共同研究を行う。

本研究ではまず【文学・歴史文献班】と【仏教・浄土教文献班】に分かれて、行者に関する資料を分析する。また行者に類する存在は、日本以外の仏教を信仰する地域にも存在している。それらとの比較検討を通して日本の行者の特徴を明らかにするため、【インド仏教文献班】についても

設置する。

また、文献研究を進める傍らで、行者たちが修行や巡礼を行った聖地に赴き、実地調査を行う。

#### 【文学・歴史研究班】

本研究班の目標は、日本における行者とよばれる宗教者の活動やそれに対する信仰が社会や宗教文化にどのような影響を与えたのかを明らかにすることである。そのための研究方法として、説話集や各地の寺社縁起、表白・願文や勧進文、あるいは歴史書や寺院文書など、文学・歴史学に関する史資料の分析を行っていく。昨年度、関連する史資料を集めつつ、修験信仰の中核となる寺社への現地調査を行った。その際に得た情報を踏まえた史資料の読解を行うことが課題である。

#### 【仏教・浄土教文献班】

本研究班の目標は、日本中世の念仏聖たちの活動について分析することで、彼らが日本の浄土教信仰にもたらした影響を明らかにすることである。具体的な研究方法として、法然浄土教に関する伝記資料などから、浄土宗と関わりのあった念仏聖の思想や活動、ネットワークについて読み解く。また覺鑊を祖とする真言浄土教の思想書や伝記資料などから、法然浄土教の周縁の念仏聖についても分析する。伝記資料には歴史的事実ではない記述が多く含まれる点が課題となる。

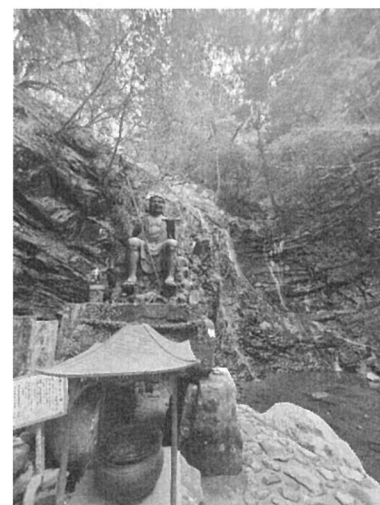
#### 【インド仏教文献班】

本研究班の目標は、日本の行者像の源泉を探るため、インド由来の聖者観や逸話や霊地の情報を明らかにすることである。方法としては、漢訳されたアビダルマ文献などを中心に、聖者の能力・教義的意図・活動地域の三観点から段階的に分析を行う。課題として、インド系資料の体系的検討が未整備である点が挙げられ、本研究はその補完を目指すとともに、日本・中国の行者研究にも資する基礎資料の整備と比較研究の足がかりを目指す。

#### 研究会等の開催状況

定期的に研究員が集まり、研究会・意見交換会を行っている。令和7年1月27日（月）には本学歴史学部の八木透教授を招き、第1回公開研究会を行った。

また、令和6年4月には熊野三山、令和7年2月には根来寺と葛城修験の聖地、そして3月には島根および鳥取の行者に関連する寺社についての実地調査を行った。



2024（令和6）年度 共同研究総合評価の実施

佛教大学総合研究所紀要 第 32 号

(2025 年 3 月 25 日刊)

総合研究所では共同研究に対する点検・評価を目的として「佛教大学共同研究評価ボード規程」に基づき進捗評価および総合評価を実施しており 2024（令和 6）年度は 1 件の総合評価を実施した。

総合評価は、本学の今後の研究活動の活性化、ならびに研究成果の発信、活用、社会への還元等に資することを目的としている。今年度対象となった共同研究は、次の 1 件であった。

・プロジェクト研究「教師の指導力“気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合—」研究代表：松村 京子（元教育学部教授）

評価ボードは、評価ボード長となる副学長、研究推進機構長、学長の指名する評価協力者（若干名）及び研究推進部長をもって構成され、評価協力者として、学外研究者 1 名、学内研究者 2 名に依頼した。

評価ボード（会議）では、匿名性を重視して評価を行うため、評価協力者から提出された共同研究評価意見書は氏名を伏せた状態で資料とし、意見書に記載された内容について、評価項目に沿って、意見交換が行われ評価が決定された。それを取り纏める形で、評価ボード長により「共同研究 総合評価」が作成された。総合評価は、総合研究所運営会議ならびに研究推進機構会議に報告がなされ、研究代表へ通知（送付）された。

評価ボードによる総合評価の実施スケジュール

|           |                             |
|-----------|-----------------------------|
| 5 月 22 日  | 各研究代表へ共同研究成果報告書の作成を依頼       |
| 6 月 28 日  | 共同研究代表より共同研究成果報告書の提出        |
| 7 月 12 日  | 共同研究評価協力者へ共同研究評価意見書の作成を依頼   |
| 10 月 7 日  | 評価協力者より共同研究評価意見書の提出         |
| 10 月 30 日 | 共同研究評価ボード（会議）を開催し、総合評価結果を決定 |
| 11 月 15 日 | 「共同研究総合評価」を評価ボード長により作成、確定   |
| 12 月 10 日 | 総合研究所運営会議へ総合評価結果を報告         |
| 12 月 11 日 | 研究推進機構会議へ総合評価結果を報告          |
| 12 月 12 日 | 研究代表へ総合評価結果を通知              |

目 次

〈論文〉

名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵『宇佐八幡縁起』考  
—『八幡愚童訓』の一伝本として—

筒井 大祐

〈論文〉

植民地期日本仏教による朝鮮人教化の困難性

山本 浄邦

〈研究ノート〉

大迫町外川目地区における早池峰系神楽の伝播について

中嶋奈津子

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第 13 号

「With コロナ時代の看護学生に対する VR（仮想現実）臨床実習法の開発およびキャリアデザインの  
 動向調査とその支援」

(2025 年 3 月 25 日刊)

目 次

はじめに

第1 章研究の背景と意義

1.1 本プロジェクト研究の背景 1.1.1 看護とは何か 1.1.2 看護教育の歴史 1.1.3 日本の看護教育制度  
 1.1.4 看護教育における臨地実習の現状と課題 1.1.5 看護におけるシミュレーション教育 1.1.6 仮想現実  
 (VR) と拡張現実 (AR) 1.1.7 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 1.2 本プロジェクト研究の意義  
 1.3 参考文献

第2 章ユマニチュード®に基づくAR（拡張現実）シミュレーターを活用した認知症患者への

ケアコミュニケーション看護教育

2.1 抄録 2.2 研究の背景 2.2.1 認知症 2.2.2 認知症に対する看護 2.2.3 ユマニチュード 2.2.4 AR（拡  
 張現実）と看護 2.3 研究目的 2.4 研究方法 2.5 研究結果 2.5.1 メインスタディの結果 2.5.2 サブスタ  
 ディの結果 2.6 考察と今後の展望 2.7 参考文献

第3 章地域・在宅看護学VR 教材の開発

3.1 抄録 3.2 研究の背景 3.2.1 日本の高齢化社会における医療・看護の現状と課題 3.2.2 地域・在宅看護  
 3.3 研究目的 3.4 研究方法 3.5 研究結果 3.5.1 VR 教材の内容 3.5.2 VR 教材の学習効果の分析  
 3.5.2.1 VR 教材を用いた事前学習の進め方 3.5.2.2 学生の評価 3.5.2.3 教員の評価 3.6 考察と今後の展望  
 3.7 参考文献

第4 章超高画質の静止画、動画、音声解説、テキスト情報を統合したVR 教材の開発

4.1 抄録 4.2 研究の背景 4.3 研究目的 4.4 研究方法 4.4.1 統合型VR コンテンツ制作技法に関する基本  
 設計 4.4.2 超高画質360 度静止画技術の採用理由とその利点 4.4.3 コンテンツ制作における技術検証とプ  
 ロセス設計 4.5 研究結果 4.5.1 VR コンテンツの構成およびアクセス可能なURL 4.5.2 超高画質360 度静  
 止画技術の具体的な応用例 4.5.3 制作したVR 教材の内容 4.5.4 学生の評価 4.6 考察と今後の方向性  
 4.7 参考文献

おわりに

執筆者一覧（研究代表を除き五十音順）

安居幸一郎（研究代表）、植村小夜子、漆葉 成彦、小澤 一史、田尻 后子、坪山 直生、浜崎 優子、  
 藪下 八重、阿部あかね、鬼頭 泰子、清水奈穂美、白井はる奈、田野中恭子、長谷川由香、瀧吉 美穂、  
 赤沢 真世、阿部 慈美、岡田 朱民、高岡 寿江、早瀬 麻子、緒方 靖恵、山本 真子

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第 14 号

「新型コロナウイルス感染下における子どもの権利擁護」

(2025 年 3 月 25 日刊)

目 次

新型コロナウイルス感染症で奪われた子どもの権利を取り戻すための ……武内 一  
 政策——子どもの権利対話で示された子どもたち自身の提言—— 朴 光駿  
 田中 智子  
 長瀬 正子  
 小林美津江  
 佐藤 洋一

社会小児科学の視点からみた子どもたちの健康と権利擁護のために ……武内 一  
 解決すべき課題——コロナ禍の子どもたちへの影響との関わりを  
 重視しながら——

社会サービスの市場化は利他主義の価値を押し出すのか： ……朴 光駿  
 ティトマスの市場化観とアローの反論が示唆するもの

COVID-19 流行による小中学生の健康や生活習慣の変化について ……佐藤 洋一  
 ——2019 年と2021 年の子どもの生活実情調査の比較——

動画学習による医療機関での性的マイノリティに対する ……佐藤 洋一  
 意識変化について

韓国の社会的包摂と民主主義の動向についての研究 ……小林美津江  
 ——第 39 回福祉思想研究会研修（済州島）を終えて——

彙 報

■2024（令和6）年度 総合研究所組織

|        |         |       |       |        |       |
|--------|---------|-------|-------|--------|-------|
| 所 長    | 細田 典明   |       |       |        |       |
| 研究推進機構 | 作田誠一郎*  | 三好 俊徳 | 有田 和臣 | 李 昇燁   | 藤岡 勲  |
| 会議委員   | 若林 靖永   | 眞砂 照美 | 得丸 敬三 | 中嶋 力都  |       |
|        | 内田 仁    |       |       |        |       |
|        | 大西 伸江** |       |       |        |       |
| 運営会議委員 | 細田 典明*  | 清川 祥恵 | 佐古 愛己 | 山内 乾史  | 香西 豊子 |
|        | 加美 嘉史   | 越智 淳子 | 米林 寿美 | 内田 仁** |       |
| 紀要編集委員 | 細田 典明*  | 清川 祥恵 | 佐古 愛己 | 山内 乾史  | 香西 豊子 |
|        | 加美 嘉史   | 越智 淳子 | 米林 寿美 | 内田 仁** |       |
| 事 務 局  | 米林 寿美   |       |       |        |       |

■2024（令和6）年度 共同研究

| No. | 研究名                                                             | 代表名   | 研究期間(年度)  |
|-----|-----------------------------------------------------------------|-------|-----------|
| 1   | (プロジェクト研究A)<br>多死社会を見据えた社会的共通資本の向上による地域共生社会の創造を目指した人材育成プログラムの検討 | 濱吉 美穂 | 2024～2026 |
| 2   | (プロジェクト研究A)<br>タイ貧困層に暮らす障がい児が医療、教育を受けるための評価システムの構築              | 和智 道生 | 2024～2026 |
| 3   | (プロジェクト研究A)<br>行者の出現と遊行遍歴による伝播の総合的研究                            | 齋藤 蒙光 | 2024～2026 |

■2024（令和6）年度 総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対し、総合研究所特別研究員規程に基づき特別研究員を募集し、8名を任用した（任用期間は2024年4月～2025年3月）。

また、総合研究所特別研究員制度の課題について総合研究所運営会議にて協議し、「総合研究所特別研究員規程」を改正し、2024（令和6）年度より、任用年度中の付帯義務としていた競争的資金（科学研究費補助金等）への申請に対して、申請を行なうことに努めるものとした。

| 氏名     | 研究テーマ                                     |
|--------|-------------------------------------------|
| 近藤 伸介  | 知性と直観、分担知と無分別智 ～ペルクソンと唯識が語る二つの認識作用～       |
| 清田 政秋  | 〈物のあはれ〉論から道の論への展開過程に現れる本居宣長の上代観・学問観       |
| 田中 タ子  | 10世紀における貴族の信仰―藤原忠平の仏事と行業を中心に―             |
| 筒井 大祐  | 蒙古襲来を画期とした文学形成の基礎的研究                      |
| 河本 信雄  | 幕末佐賀藩のアーモストロング砲模造の実態解明および田中久重に関する研究<br>深耕 |
| 中嶋 奈津子 | 神楽の継承と伝播の研究―なぜ、早池峰神楽は継承できたのか―             |
| 渡 勇輝   | 柳田国男の神道論と南島談話会の学知ネットワーク                   |
| 山口 瑞徳  | 日本国内の宗教運動における終末論的救済観の研究                   |

■活動記録 [2024 (令和 6) 年 4 月～2025 (令和 7) 年 3 月]

2024年

- 4月10日 第1回研究推進機構会議  
第1回総合研究所運営会議
- 24日 第2回研究推進機構会議
- 5月 8日 第2回総合研究所運営会議
- 15日 第3回研究推進機構会議
- 29日 第3回総合研究所運営会議
- 6月 5日 第4回研究推進機構会議
- 19日 第5回研究推進機構会議
- 7月10日 第6回研究推進機構会議
- 24日 第4回総合研究所運営会議  
総合研究所特別研究員懇談会 (対面・Zoom 併用) 懇親会 (対面)
- 9月 3日 第5回総合研究所運営会議
- 11日 第7回研究推進機構会議
- 10月 2日 第8回研究推進機構会議
- 16日 第9回研究推進機構会議
- 29日 第6回総合研究所運営会議
- 11月 6日 第10回研究推進機構会議
- 22日 第11回研究推進機構会議 (臨時) メール会議
- 12月 11日 第12回研究推進機構会議
- 10日 第7回総合研究所運営会議

2025年

- 1月 8日 第13回研究推進機構会議
- 14日 第8回総合研究所運営会議 流会
- 22日 第14回研究推進機構会議 流会
- 2月 18日 第9回総合研究所運営会議
- 5日 第15回研究推進機構会議
- 19日 第16回研究推進機構会議
- 3月 7日 第10回総合研究所運営会議
- 12日 第17回研究推進機構会議

■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第46号をお届けします。内容は、今年度から開始した新規共同研究の活動報告と総合評価の実施、および総合研究所紀要第32号と共同研究成果報告論文集第13・14号の目次です。今後も、より積極的・戦略的に総合研究所の活動が進められ、全学的に総合研究所の活動がより認知され、積極的な応募が増えることを期待します。(H)

---

佛教大学総合研究所報 第46号

発行 2025(令和7)年3月25日

発行所 佛教大学総合研究所

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL:075-491-2141(代表)

FAX:075-495-2151(直通)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/>